SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Validation of Learning in Online Intercultural Education Programs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 案野, 香子, デオ, ヴィピン クマル メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028600

オンライン国際教育プログラムにおける学びの検証

案野香子／デオ・ヴィピン・クマル

【要　旨】

本稿では、2021年度に静岡大学で実施したオンライン国際教育プログラムの実践の報告と検証を行った。2021年度は異文化理解教育を目的とする「オンラインスプリングコース」、本学への留学生誘致のための広報を目的とした「オンラインサマーコース」「オンラインウィンターコース」の3本を実施した。

オンラインで海外とつなぐことによって、海外・国内問わず、自社会から出たことのない学生にとって自己や異文化を見つめる思考の機会となった。また使用言語が主に英語のコースであっても、日本語・日本文化学習が意味のある体験として捉えられていることもわかった。一方で、広報としては静岡大学の教員や学生の質の高さをアピールできるプログラムであったが、「国際共修」としての意義は薄かった。

今後、国際教育プログラムを企画するにあたっては、参加者が協働で学びあい思考を深める国際共修を実現させるように仕向けることによって、静岡大学の質の高い研究・教育を対外的に示すことを目的とすることが重要である。

【キーワード】オンライン、国際共修、意味ある交流、日本語・日本文化学習

1　はじめに

静岡大学は2002年から毎年6月から7月にかけての約三週間、韓国、アメリカ、カナダ、タイの大学間交流協定校より学生を10～20名程度受入れ、日本語・日本文化体験および静大生との相互交流を目的としたサマースクールを実施してきた。しかし、2020年度はコロナ禍により従来から行われていた対面式サマースクールは中止を余儀なくされた。静岡大学にて約20年続いてきたイベントであったが、一方で、近年は参加人数が増えていないこと、内容も新鮮味が薄れていたことから、運営、受入れ対象、プログラム内容などの見直しを迫られてもいた。

そのような状況下において、2021年度は依然コロナ禍が続いていたこともあり、当初から対面式サマースクールは計画せず、それに代わるオンラインによるショートプログラムを実施することとした。

また同年は大学間交流協定校からの半年～1年間の交換留学生の受け入れも中止していたため、海外の協定校より、静岡大学の授業をオンラインで受講できないかという問い合わせも受けていた。

このように、有事への対応だけでなく教育実践の見直しの機会として、静岡大学では2021年度は次の①～③の3本のオンラインショートプログラムを実施した（2021年10月現在）。

① オンラインスプリングコース（以下、スプリング）
海外大学間交流協定校の学生を対象とした異文化理解教育目的のコース（全5回）
② オンラインサマーコース（以下、サマー）
海外（本年度はインド）の中高生を対象とした、静岡大学アジアブリッジプログラム（以下、ABP）学士課程へのリクルートを目的とした日本語・日本文化体験コース（5日間）
③ オンラインウィンターコース（以下、ウィンター）
海外（本年度はインド）の大学生を対象とし、静岡大学ABP修士課程へのリクルートを目的とした静岡大学の教育・研究体験コース（5日間）

コースのコーディネーターは、①が案野、②③が案野、デオである。

本報告では、上記3本のオンラインコースの実践を報告し、教育の内容と効果を検証する。そしてポストコロナ時代の静岡大学におけるオンライン国際教育の方向性を考察する。

ここでは藤本（2019：27）に倣い、「オンライン授業」を「対面コミュニケーションができるウェブコミュニケーションシステムを使い、同じ時間にインターネットでアクセスし、教師と学習者が画面越しに顔を合わせて行う授業」とする。

なお、参加者にコースアンケートを実施する際には、その回答を研究目的に使用し、『静岡大学国際連携推進機構紀第4号』にて報告することへの許可を事前にとっていることをここで述べておく。

2　オンラインスプリングコース

2.1　実施の目的

前年度に海外協定校から静岡大学の授業をオンラインで受講したいという問い合わせがあったこと、2021年度前期はコロナ禍で交換留学生の受け入れがないことから、オンライン（Zoom）により海外協定校学生に静岡大学の授業1科目（1コマ90分）を提供することを国際連携推進機構にて企画した。

本学ではそれまで海外学生をオンラインで留学生として正式に受け入れた実績はなかった。しかし、コロナ禍が収束したあともオンライン授業の需要はあると考え、この「スプリング」をオンラインによる留学生受け入れを促進するパイロットケースとすることとした。

さらに、オンラインという新しい形態を取り入れるだけでなく、海外学生はそこで日本語能力や異文化理解能力をどのように習得するのか、国内から「スプリング」に参加した静岡大学の学生は共修することで何を学ぶのか、という教育的効果も同時に検証することとした。

2.2　内容

本コース（「スプリング」）は、様々な国や文化の学生たちが現代若者社会の身近な問題について主体的に話し合うことで、異文化理解能力を高めることを目的とした。

対象は、本学大学間交流協定校学生で海外に在住し、日本語能力試験N2程度の者とした。募集方法は、日本語教育を行っている大学間交流協定校にコース概要とシラバスを含

む募集要項を送付し、参加希望者は個人情報および応募動機の作文を書いてGoogle Formで回答した。静岡大学の国内学生は、2020年度スチューデント・アンバサダープログラム(注1)に参加した学生および国際交流ボランティアから「スプリング」参加希望者を募った。

参加者は以下の5名である。

【表1】

参加者	国　籍	日本・海外との関わり	参加動機
A	マレーシア	政府派遣留学生として4年間日本の国立大学に留学経験あり	異文化理解に興味がある。久しぶりに日本語を話す機会がほしかった。
B	中　国	静岡大学大学院生（未渡日）	コロナ水際対策で入国できないため、日本語の練習をしたい。
C	日　本	海外留学予定	海外の文化に興味があった。
D	日　本	海外留学予定	海外の文化に興味があった。
E	ベトナム	静大ABP学士生	本コースに興味があった。

実際に参加者の核となるはずだった海外交流協定校学生の応募が極めて少なかった要因の一つとして、実施時間を日本時間の11時～12時半に設定してしまい、海外の時差への配慮が足りなかったことが挙げられる。

実施日は、①4月21日㈬、②4月28日㈬、③5月12日㈬、④5月19日㈬、⑤5月26日㈬の全5回で、1回90分、受講料は無料とした。

単位は当初、「シラバス、出席率、成績を記した受講証明書をもとに、各協定校が単位を認定することができる。」として募集したが、半期1科目相当とするほどの実施回数ではなかったため、受講証明書発行の問い合わせはなかった。なお、国内学生には単位を出す計画はなかった。

海外学生のうち、Aは第1回からの参加で、Bは途中からの参加であった。国内学生C、D、Eに対しては、コース開始前に全員でオンラインで事前打ち合わせを行い、コースの趣旨を確認するとともに互いに交流をもった。

2.3　活動内容

次の【表2】は全5回の活動内容である。国内学生はボランティアとしての参加で、全ての日程の参加を義務付けられず、海外学生（A、B）のみの日、海外学生と国内学生（C、D、E）と学習する日のそれぞれができた。

授業は、毎回それぞれの話題をもとに、教師が参加者に問いを投げかけ、思考を促しながら、議論を構築していくというアクティブラーニング形式をとった。また内容に応じてロールプレイも取り入れた。教師と学生、学生と学生相互の意見のやりとりが活発に見られた。

【表２】

	トピック	参加者	授業内容
①	イスラム教・ラマダン、アジアでのマレーシア	A	自己紹介、所属大学の紹介、日本で過ごしたときの思い出。イスラム教の考え方を話す。アジアにおけるマレーシアについて。
②	話題と価値観	A、C、D、E	なじみのない相手との間で触れてもよい／よくない話題があることを知り、それらの根底にある価値観をロールプレイによって考察する。多民族・多宗教国家の価値観を学ぶ。
③	中国の若者	B	自己紹介。中国の若者の楽しみ方や恋愛事情
④	若者の消費行動	A、B、C	若者の金銭感覚。車など高額な所有物に固執しないのはなぜか。日本、マレーシア、中国の若者が大切だと思うこと／もの
⑤	時代と個性	A、B	時代、人名、そして個性。 多民族国家であるマレーシアと中国の生活

コース企画当初は、ジェンダーやハラスメントなど比較的広く関心があると思われる社会的トピックを用意していた。しかし、バックグラウンドが全く異なる多様な海外学生が、画面越しに、しかも初対面で出会うことを考えると、議論の過程で価値観の衝突が起きやすく、また、参加者によっては不快感を覚えかねないことも想定できた。そこで、最終的に現代の若者をとりまく身近な話題を選び、そこから参加者の異文化理解能力の向上を図るよう工夫した。

2.4　授業の振り返り

毎回の授業の後にGoogle Formで振り返りアンケートを実施した。5回を通して参加者がどのようなことを考えているかを知るため、アンケートの質問項目は各回ごとに異なるものとした。

第1回、第3回目の振り返りアンケートも実施したが、参加者がそれぞれ1名で回答内容が個人的且つ「共修」の効果が測れないものであることから、以下ではグループ学習が実現できた第2回、4回、5回の振り返りアンケートを載せる。なお、アンケートの質問項目は実際はさらに細かいものであるが、参加者の感じ方の傾向が見られるように、それぞれの回答を集約している。

【表３】第２回「話題と価値観」

	トピック及びクラス活動の感想	オンライン交流の意義
A	満足。もっと参加者が多かったらよかった。 軽い話題で話しやすかった。	素直に意見やアイディアを共有できる。
C	普段はできないこと（ディスカッション）ができた。 自分や相手のことを知るという機会になった。	お金をかけずに互いについて知ることができる。
D	普段から多文化共生に関心を持っているため、新しい知見や感覚はもてなかった。	コストを低く抑えられ、海外の学生の考え方や能力に触れる機会になった。
E	異文化という問題がちょっとずつ理解できた。	海外の学生の話を聞いたり話し合ったりできる。

2020年のコロナ禍でオンライン授業が大規模に始まってから約1年経った2021年になると、参加者たちは既にオンライン授業には慣れてはいたであろう。しかし、海外在住の学生とリアルタイムでつながってディスカッションやロールプレイをしたことは、自己を再発見し、新しい価値観を考える学習体験の貴重な機会であり、むしろ国内学生にとって刺激のある回となったという手ごたえがあった。

【表４】第４回「若者の消費行動」

	トピック及びクラス活動の感想	参加者全員が活発に議論できたか。
A	情報が豊富でとてもよいテーマ。最近の若者の考え方を知ることができて楽しかった。	とても。メンバー全員が積極的に意見を述べた。
B	深刻なテーマだったので、もっとリラックスできる話題がよかった。	まあまあ。クラスメイトの発言が速い。自分の意見を活発に言えなかった。先生以外の人と話す時、緊張する。
C	自分も若者という立場から気になっていたテーマで他の国の方と話し合えた。	普通。言語的なコミュニケーションの問題に加えてオンラインだったから。

第4回授業は教師としてあまりうまくいった授業ではなかったと反省していた。そこで、【表４】の質問により振り返りをしてもらった。BとCはコミュニケーションが活発ではなかったと感じている一方、Aはメンバー全員が積極的に意見を述べることができたと答えている。Aは日本での生活経験が長く、話題が豊富であり、来日経験がなく日本語独学のBよりはるかに日本語運用力が高いことをB自身とCは認識していたが、Aはその差に気がついておらず、どんどん発言を進めてしまっていた。

オンラインでは互いの声が重なるのを防ぐために、基本的に声を出してあいづちを打たず、他者の発言に対して大きな反応はあまりしない。それに加えて、ほかの参加者が次の発話を考えている間（ま）が、一部の参加者の独走につながる危険性は教室での対面の討論よりも大きいこともわかった。そのことを十分考慮し、ファシリテーターとして全員が均等に話せるクラス運営が必要であった。

なお、Bは国でごく当たり前の日常となっている社会的な事例を客観的に自覚して言語化することができず、その思考の行程が苦痛で、「深刻なテーマ」と記述したと思われる。

【表５】第５回「時代、人名、個性」

	オンラインスプリングコース全般の感想	今後に期待すること
A	まあまあ満足。 キラキラネームなど、コースで初めて学んだことがたくさんあった。週ごとのテーマがとても面白く、２時間の授業があっという間だった。	将来全ての留学生が日本に滞在できるようになったら、生活や勉強の困難について日本でみんなで話し合うことができるだろう。
B	とても満足。 日本語で自然に対話することができた。	もっと多くの人が参加できるといい。

静岡大学に留学することが決まっている海外学生たちには、オンラインコースは渡日前に日本語や日本文化の予備研修的な役割になるのではないかという提案があった。

2.5 「スプリング」で見られた国際共修の意義

「国際共修」は、末松和子（2019：iii）では次のように定義されている。

> 言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。

末松（2019）の定義の中からも確認できるように、国際共修は「意味ある交流」「知的交流」でなければならない。その観点から本コースを振り返ってみる。

開始前のテーマ設定の際、いわゆるＺ世代といわれる若い世代が互いに共感したり、違いを発見するといったことを期待してプログラムを企画したが、実際に参加者の顔ぶれを見て、軌道修正しながらテーマを設定していくこととなった。

それらのテーマに基づいたアクティブラーニング形式の授業の中で、海外学生・国内学生問わず、参加者は自身の「当たり前」を再認識していき、Ｚ世代という枠を超えた個々の価値観を知的に意識することができたと思われる。

一方で、国籍問わず母国から一度も出たことのない学生の中には、アクティブラーニングの活動に慣れていなかったり、自己に対して問いを立て、自社会を客観視し、他者と相対化したりする異文化理解の作業は苦しいと感じた者もいたようである。そのためか、協働作業を通しての学びあいの効果を参加者全体で共有することができなかった面があることは否めない。

国際共修は「いろいろな国の人との会話を楽しむ」ことではなく、「意味ある交流」つまり「学び」につながるべきものだと考えると、ファシリテーターは、自社会から出たことがなく、アクティブラーニングや異文化理解の教育を受けたことのない参加者の存在を十分に理解し、彼らの社会の情勢や価値観を通常以上に事前に勉強し、自尊心を傷つけないよう丁寧に問いかけ、思考を促すことが求められる。

本コースはオンラインでの国際共修の意義と難しさが浮き彫りになった。経済的負担なく、現地にいながら様々な参加者の経験を共有することができ、自己を相対化できる。その意味では「意味のある交流」ができたといえる。今回は国内学生にとっても刺激を強く受けるものであったことも有意義な一面であった。

一方で、「異文化理解活動・異文化コミュニケーションに免疫がない学生、アクティブラーニングに不慣れな学生」（末松2019）にとっては、自社会・自文化から離れていない

ことが、自己を見つめなおしたり、批判的な思考をすることに大きな困難を感じるということもわかった。

今回のサブカルチャー的なコンテンツの中でも参加者たちはそれぞれの文化の違いを十分に理解することができた。しかし今後はさらにコンテンツを洗練し、大学教育としての密度の濃いオンライン教育の開発に努めることが課題である。

また、web会議システムでの会話のターンの取り方は、オンライン授業のテクニカルな面での課題として次に生かしていきたい。

今年度は週1回5週の開催であったが、さらに開催期間を検討し、集中コースとして実施した国際教育の成果を、異文化間能力を含む自己（Self）全体を測定することが可能である客観的測定テスト「BEVI」（Beliefs, Events and Values Inventory）で、オンライン国際共修においても異文化理解能力の向上が見られるのかを検証することも今後の課題である。

3　オンラインサマーコース

3.1　実施の目的

本節では、2021年6月に実施した「オンラインサマーコース」（以下、サマー）の実践を検証する。

本コースは、インドの中高一貫校一校にターゲットを絞って参加者を募り、日本語学習・日本文化体験を通して、静岡大学の勉学生活を紹介した。静岡大学ABP学士課程への留学を促すという広報の目的が強い。

3.2　内容

本コースは、6月14日㈪～18日㈮の5日間、日本時間の13：00～16：00に集中的に実施した。

筆者（デオ）とつながりのあるインドのカルールにある中高一貫校に呼びかけた結果、日本語能力試験N4～N3程度の15名の応募者が集まった。コース修了後、最終発表および振り返りに基づきコーディネーター（案野）の署名による受講証明書を発行した。

3.3　活動内容と事後アンケート

【表6】は活動内容である。

【表6】

	トピック	活動内容
①	オリエンテーション ABP学生による静岡大学紹介	コース説明 自己紹介（英語）、アイスブレーキング ABP学生による静大紹介 　留学の動機と生活 　静岡の町と静大のバーチャルツアー 　質疑応答

②	＜前半＞ 日本の国土と自然、習慣と伝統 ＜後半＞ 風呂敷を使おう	＜前半＞ 本機構教員による日本の国土と伝統の紹介。 ＜後半＞ 同教員がいろいろな形状の物を風呂敷で包み、結ぶ実践の様子をリアルタイムで見ながら、参加者たちも自分の布を使って物を包む体験をする。 各参加者は50㎝×50㎝の布を各自用意。
③	初級　日本語会話体験（１）	90分２コマ、レベル別に３グループ、１グループ５名。グループは１コマ１つのトピックで会話（例：「町の様子」「日本のお土産」「ヨガ」など）
④	初級　日本語会話体験（２）	90分２コマ、レベル別に３グループ、１グループ５名。グループは１コマ１つのトピックで会話（例：「外国語」「旅行」「食べ物」「プレゼント」など）
⑤	＜前半＞ 日本の歌を歌おう ＜後半＞ 修了式	＜前半＞ 静岡大学混声合唱団学生による歌指導 「世界に一つだけの花」（SMAP） ＜後半＞ 参加者による３分間スピーチ（日本語） 国際連携推進機構教職員および相手校教員からのメッセージ
⑥	修了後の振り返り	アンケート

【表７】はコース修了後のGoogle Form によるアンケートである。質問と回答は英語である。日本語訳は筆者（案野）による。回答は自由記述とした。類似の回答はまとめ、(　) 内に回答数を示した。

【表７】事後アンケート結果

質問	コメント
日本文化・風呂敷体験の感想	風呂敷のいろいろな使い方や、結び方について学んだ（9）とてもよかった（７）。先生がよかった（６） 日本についてたくさん勉強できた（３） 日本文化はインド文化と似ているところがある（３） 時間を守るというところがよかった（１）
日本語会話の感想	いい経験（４） たくさんの新しい語彙を学んだ。役に立つ表現を学べた（３） インタラクティブで面白かった（３） 日本語ネイティブの先生と初めて話した（２） 先生がやさしかった（４）
日本語の歌の感想	楽しかった／良い経験だった（10） 自分はその歌を前に少し知っていたからとてもうれしかった（１） 最終日にみんなで歌ったのは一番の思い出（２） いい歌だと思った（１） 先生が歌詞を見せながらゆっくり丁寧に教えてくれた（１）
全体として	非常に満足（14）、満足（１）
最も思い出に残ったこと	風呂敷の使い方（６）、静大バーチャルツアー（３） 静大生と話したこと（２）、すべて（２） 日本語会話（２）、先生（５）、歌（２）、

改善してほしいこと	期間をもっと長くしてほしい（3）、ない（2） もっとたくさんの日本人の学生と話したかった（1） 希望する学生がみな参加できたらよかった（1） 1回の授業が長い（1） オンラインクイズで競うようにしてほしい（1） 日本の伝統文化についてもっとたくさんの情報があったらよかった（1）
静岡大学の印象	静大のバーチャルツアーを見て、静大に留学しようと思った（5） 先生と学生のことがとても好きになった（2） 日本人の先生と話して、静大で勉強したくなった（1） 優秀な先生がいる（1）。先生がとても親切（1） 先生と学生がとても良い人たちで、初めて話しているとは感じなかった（1） 静大で勉強できるようにがんばりたい（1） 多くのことが勉強できそう。静大に良い印象をもった（1） 野球グラウンドがきれい（1） 2つのキャンパスがある大きい大学でたくさんの学部がある（1）

3.4　コース内容の検証

本「サマー」は【表6】の授業内容および【表7】の参加者の反応からわかるように、本学学生および多くの本機構教員の協力で成功裏に終えることができた。

オンラインでありながら、「サマー」は「人の顔が見える」「手作り」のコースであった。

1日目の静大バーチャルツアーは本学留学生自らがキャンパスや周辺の街を自分の目線で撮影し、英語と日本語で解説を入れたYouTubeを参加者は楽しんだ。その景色は「留学生が見せたい静岡・静大」であり、海外参加者にとっては魅力であったようだ。

2日目の日本文化紹介では、一枚の小さな布である風呂敷が、あらゆる形のものを包んでしまうまさに「Furoshiki Magic」に魅了されていた。

3日目、4日目は場面を想像しやすいように写真や音声を共有し、日本語ネイティブの日本語担当教師と会話を楽しんだ。アンケートには「Interactive」であったことを評価する回答が多く、「スプリング」に次ぎ「サマー」においても「教え込まない」日本語教育を実現できたと言える。

5日目は、静岡大学混声合唱団の団員2名の歌唱指導のもと、参加者は日本語の歌を楽しんだ。対面で合唱するのとは勝手が違い、Zoomでは同時に声を出すと他の人の声が聞こえなくなってしまうこと、全員がマイクオンにすると時間差が生じたり、音声が混乱してしまうという不便さがある。そのため、ユニゾンで歌えて且つマイクオフにしても一人で楽しめる選曲をした。

最終的に参加者は静岡大学に非常によい印象をもつようになった。その大きな要因はバーチャルツアー、学生と教師の人間性である。言い換えれば、オンラインでありながら、参加者が「生きた体験」をすることができたといえよう。

一方で、アンケート回答に「オンラインクイズ」の要望があったことは事実である。デジタルネイティブにとってゲームがこれだけ日常になっている現在、デジタルの機能を生かした授業も参加者の学習意欲を引き出すためには必要であろう。

教師が教育スキルを磨き、さらにデジタル機能を効果的に駆使することによって実現できる質の高いオンライン教育の在り方を今後さらに検討していきたい。

3.5 「学び」および「広報」としての「サマー」の検証

前節までに本「サマー」での活動を報告した。その中で、2日目の日本文化紹介の感想の中に「インドと似ている」「インドと同じ」というコメントが多く見られた。離れている国同士の間に文化的な普遍性や共通点があることへの気づきは、本コースの最大の学びと思われる。その発見から、再度日本を見つめることによって、地図の上でのはるか遠くの国であった日本が、心理的により身近な存在になったことが推察される。

「サマー」は静大への留学生誘致の広報が目的であり、実際にインドからの優秀な学生の入学につながらなければ成果があったとは言えない。「サマー」で示した静岡大学の魅力を参加者に十分に伝えつつ、同時に学術的コンテンツをあわせもつ総合的な国際プログラムの企画・実践が課題である。

4　オンラインウィンターコース

4.1　目的

6月の中高生をターゲットとした「サマー」に続き、12月は、本学大学間交流協定校のアンナ大学（インド）の提携カレッジの大学生をターゲットとし、ABP（修士課程）をはじめとする静岡大学の留学プログラム広報活動の一環として「ウィンター」を企画した。

4.2　内容

実施は、12月６日㈪から10日㈮の５日間で、日本時間13：00～16：00に実施した。日本語能力試験Ｎ５～４程度の学生の応募が16名あった。

4.3　授業内容

【表８】 授業内容

	トピック	授業内容
①	オリエンテーション 研究室紹介	＜前半＞ コース概要 　自己紹介、アイスブレーキング、ABP紹介 ＜後半＞ 静大教員の研究室動画紹介
②	日本語会話（１）	レベル別２グループ 　外国人社員と日本人社員の職場のミスコミュニケーション
③	日本語会話（２）	レベル別２グループ 　外国人社員と日本人社員の職場のミスコミュニケーション
④	静大学生とのディスカッション	事前に希望のあったトピックで静大生と英語と日本語でディスカッション 「日本人とインド人の生活」「教育制度」「仕事文化」「日本語の魅力」など
⑤	静大生との研究交流 ＜後半＞ 修了式	＜前半＞ 参加者と静岡大学生が各自の研究テーマについて発表・質疑応答 ＜後半＞ 修了式
⑥	振り返り	事後アンケート

「サマー」は比較的年齢の低い参加者に対して「日本のおもしろさ」が体感できる内容であったが、「ウィンター」はすでに大学で研究に取り組んでいる参加者たちのために、よりアカデミックな要素を強めた内容とした。

また、大学院修了後に日本で就職することを希望する参加者たちのために、日本での就職に役に立つ初級会話のクラスを盛り込んだ。この内容は事前に相手大学の教員たちとZoomで打ち合わせをしたときに出されたリクエストにこたえたものである。「ウィンター」では構造的な言語教育にとどまらず、職場で日本人社員と外国人社員がどのようなミスコミュニケーションをしてしまうかを動画で観察し、どのように日本語で問題解決するかといった内容とした。その活動を通して、参加者たちは日本の職場の時間の概念、外国人が戸惑う日本語表現など文化的側面を学ぶことができた。

そのほか、静大生とのディスカッションおよび研究紹介を通した学生の相互交流の時間を多く設けた。

4.4　コース内容の検証

【表９】事後アンケート結果

質問	コメント
研究室紹介についての感想	興味深く見ることができた（10）、すばらしい（６）、多くの情報を得られた（３）、静岡大学についてよくわかった（２）
ABPについての感想	すばらしい（13）、日本人とよく交流ができる（１）、自分の知識とスキルを向上させられそう（１）、あまり情報を得られなかった（１）
日本語会話の感想	非常にすばらしかった（13）、ビジネスコミュニケーションを学んだ（３）、日本語について新しいことを学んだ（２）
静岡大学の学生との討論	日本の文化や生活について学んだ（８）、多くを学んだ（６）、すばらしい（３）
静岡大学生との研究交流	とてもよかった（12）、互いの研究について知ることができた（２）
全体として	非常に満足（15）、満足（２）
最も学んだこと	日本語コミュニケーション（４）、日本語（４）、日本文化（５）、静岡大学について（３）
改善してほしいこと	コースの期間を延ばしてほしい（７）、この方法でよい（３）、もっと交流の機会を設けてほしい（２）
静岡大学の印象	研究環境が整っている（３）、修士課程に入りたい（２）、よい印象をもった（10）

【表９】から「ウィンター」において参加者が最も手ごたえを感じたのは「日本語コミュニケーション」「日本文化」「静岡大学の研究」であり、コーディネーターがコースデザインの段階で意図していたことと一致している。ここでの「日本文化」というのは、目に見える文化だけでなく、日本語会話クラスや静岡大学学生との交流の中で学んだ日本的な価値観や考え方といった見えない文化のことであると思われるが、「ウィンター」の参加者が大

学生であったため、そのような抽象的な概念が理解され、評価されたのだと思われる。換言すれば海外で学ぶことの難しい教育内容をこの「ウィンター」で学ぶことができたといえる。また、研究室紹介ビデオや、学生相互の研究発表および質疑応答を通して、静岡大学が研究をする高等教育機関であることも十分理解され、その刺激によって参加者自身の研究意欲が増進していることもわかる。

「ウィンター」では静岡大学の教員の研究や研究室の雰囲気を示すことができた。同時に、日本人の価値観や考え方を学生同士の対話の中から参加者自身が発見することができた。「サマー」よりも年齢のあがった参加者を対象とした「ウィンター」の学びの意義であると思われる。

5　まとめ

本稿では2021年度に実施したオンラインによる国際教育プログラム3本の実践を報告し、学びを検証した。

「スプリング」では、日本語能力の高い協定校学生と静大学生との日本語での異文化理解を目的とした。「サマー」では、ABP学士課程の広報を目的として、インドの中高生を対象とした日本語・日本文化体験を中心に据えたプログラムを実施した。そして「ウィンター」では、ABP修士課程の広報を目的として、インドの大学生を対象に、静岡大学の研究、日本語コミュニケーションおよび日本の職場文化理解を中心とするプログラムを実施した。

オンラインならではの課題として、ネット環境が悪かったということとWeb会議システムでの会話のターンのとりかたがうまくいかない事例があったことも挙げられるが、一方でオンラインだからこそ、動画や図、写真、音楽をフルに活用し、視覚・聴覚に訴える工夫を凝らすことで、飽きさせずに静岡大学や日本を見せるプログラムが実現できた。

オンラインで海外とつないだ学習においては、自社会から出たことがなく、異文化理解教育に不慣れな参加者にとってはアクティブラーニングによって気づきを得ることに困難を感じる場合があることがわかった。しかし、オンラインの手軽さとコストの安さで、外国語を学び、自分で異文化について新たな発見をする体験もできる。

また、「サマー」「ウィンター」は使用言語は主に英語であったが、参加者が最も印象深く感じたことのほとんどが日本語・日本文化学習であった。今後、国際教育プログラムを英語で実施するにあたっても、形の如何にかかわらず日本語・日本文化学習体験を盛り込むことは必要であろう。

ただし、残念ながら今回の3本のプログラムは実験的に様々な体験項目を盛り込んだ故、プログラムそれぞれの到達目標が明確ではなく、「国際共修」と言えるものではなかった。広報としては静岡大学の教員や学生の質の高さをアピールできるプログラムであったが、一方で一貫した教育目標をたてるには至らなかった。

今後、国際教育プログラムを企画するにあたっては、対面・オンラインのどちらでも、参加者が協働で学びあい思考を深める国際共修を実現させるように仕向けることによって、静岡大学の質の高い研究・教育を国際的に示すことを目的とすることが重要であろう。そのためには、部局内での単発のイベントにとどめることなく、継続性のあるCOIL（オンライン国際交流学習：Collaborative Online International Learning）としてのプログラム開

発を部局や大学を超えた規模で実施すること、その際には、参加者が他者との異文化衝突とそこにおける思考を意味のあるものと感じられるよう、事前学習・事後学習をより充実させる必要がある。そのことによって、静岡大学での国際的な学びの意義を新たに追及していくことができるであろう。

【注１】スチューデント・アンバサダープログラム：
キャンパスの国際化を担うグローバル・リーダーの育成を目指すプログラム。参加者（日本人学生・留学生）はチームでSDGs（自分たちの思いを込めたSDGs）をテーマに、世界に目を向けられる、国際的な視野を持つきっかけになるような活動を企画実施している。当プログラムは全編英語のイベントである。（静岡大学国際連携推進機構ＨＰより）

【参考文献】
末松和子（2019a）「はじめに」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
末松和子（2019b）「学生を主体とした授業づくりと教員の役割」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂
藤本かおる（2019）「日本語初級レベルのグループオンライン授業での教室活動に関する研究―担当教師へのインタビューを中心に―」『JeLA学会誌　Vol.19』

Validation of Learning in Online Intercultural Education Programs

ANNO Kyoko, Deo Vipin Kumar

【Abstract】

This paper reports and verifies the implementation of online international education programs at Shizuoka University in 2021. In 2021, three courses were conducted: “Online Spring Course” for cross-cultural education, “Online Summer Course” and “Online Winter Course” for public relations to attract international students to Shizuoka University.

By connecting with other countries online, it became an opportunity for students who have never been out of their own societies whether overseas or in Japan, to think about themselves and other cultures. It was also found that learning Japanese language and culture was seen as a meaningful experience, even where the primary language was English.

On the other hand, as a public relations tool, the program was able to appeal to the high quality of Shizuoka University’s faculty members and students, but its significance as an “international collaborative learning” was limited.

In the future, it is important to establish an international education program that aims to demonstrate the high quality of Shizuoka University’s research and education to the outside world by encouraging the participants to realize international collaborative learning programs in which they can learn and deepen their thinking through collaboration.

【Keyword】online, intercultural collaborative learning, meaningful interaction, Japanese language and culture study